

4 朝鮮のハンセン病医療に従事した

志賀潔

魯 紅 梅

志賀潔については赤痢菌の発見者として広く知られている。演者はこの一年間植民地時代における朝鮮ハンセン病対策について日韓の資料を調査、研究していたところ、細菌学者の志賀潔が朝鮮のハンセン病医療にたずさわっていたことがわかった。

志賀潔の人物記に関してはすでに先人たちの報告がある。志賀潔の朝鮮における研究については平野春雄氏は「志賀先生が特に興味を持ったのは結核と癩である」と紹介し、萩原彦三氏は「博士は癩に関してもすぐれた業績を残されたそうである」と紹介した。しかし、朝鮮のハンセン病医療における志賀潔の詳細な事績についてはあまり知られていない。本報告ではその事績を発表する。

志賀潔は一八七〇年に仙台市谷地小路(現東七番丁八五)に生まれ、一八九二年に東京帝国大学医科大学に入学し、一八九六年に卒業した。その後伝染病研究所に入り、北里柴三郎に師事し、一八九七年に二七歳の若さで赤痢菌に関する最初の報告を発表した。一九二〇年に朝鮮総督府医院長に就任し、京城医学専門学校校長を兼任した。一九二六年に新設の京城帝国大学の医学部長に推され、一九二九年には京城帝国大学総長に就任した。一九三一年に総長を辞任し、帰国した。

朝鮮での一年間、志賀潔は医学教育のほか、保健衛生や医事行政の事にも関与して社会的にも多忙な日々を過ごした。そのなかでハンセン病医療における志賀潔の事績は大きく「癩菌の培養」と「癩の予防」の二つに分けられる。

一九二〇年来任した志賀潔は「今後は癩の問題については大いに努力するつもりだ。癩菌の培養をはじめ、大風子油が癩の治療に効果がありとされる学問的根拠などまだ明らかでない問題が多い。また伝染を防ぐための早期発見の方法もまだ明らかでない」とその抱負を語った

と当時の学務課長萩原彦三は伝える。

癩菌培養の研究について、一九二九年から一九三〇年に「癩菌培養の研究」、「癩菌の培養及集落形成」を発表し、「癩菌培養の研究(二)」では癩組織を5%硫酸水に処置し、馬鈴薯培地に植えることにより癩菌培養に成功したと述べ、「癩菌培養の研究(二)」では、しかし未だ癩菌と断定できないと述べた。一九三五年には「癩菌の研究(第二)動物試験(マウス脳内接種)」という題で癩菌の動物接種としてマウスが最も適していると発表した。一九四〇年、全羅南道小鹿島で開かれた第一四回日本癩学会に参加し、「癩研究の十余年」という題で特別講演を行い、志賀自身の癩菌の培養研究を総括した。

ハンセン病の予防について、すでに一九〇九年に「フリッピンに於けるキュリオン癩病部落の状況」を発表し、癩撲滅は隔離法を第一とすべきことを主張した。癩部落に患者を収容隔離し、余生を終わらせる必要はあるが、獄舎のようにしてはならないと述べた。一九二六年には「朝鮮に於ける癩治療の成績並びに癩患者隔離に対する意見」を発表し、大風子油エチールエステル療法

の成績を述べ、朝鮮における癩患者の蔓延状況と隔離策に對する意見を述べた。一九二七年四月一五日付け『東亜日報』は「癩病根絶は去勢外無道理」という題で、志賀博士が癩患者根絶のために去勢に関する法律の制定を主張したと記している。一九三一年に「癩の予防と撲滅を期す」を発表し、隔離のほか、衛生上の改良及び食物栄養状態の改善も癩伝染の素質を減少し得るので患者を減少させると述べた。

ところが、一九三〇年の京城帝国大学開学記念日に行った「癩の歴史と癩菌の研究」の講演により癩学会の一部の批判を受け、退任の動機となった。

癩問題の解決には医療の進歩と密接に関係ある。志賀潔は癩菌の基礎研究により医療の進歩を図り、一方新患者を増やさないための予防対策についても研究したのである。

(順天堂大学医学部医史学研究室)